

皆さま

梅雨お見舞い申し上げます。

こちらはやっと気温が上がって「春」らしくなりました。

今回の内容は大修館から出版されたパリクラブの本の中で触れた内容とかなりダブっています。

2週間前に訪れたシエナがすっかり気に入りました。授業のない日と週末を併せて小旅行にちよくちよく行けるのはありがたいです。いらした方も多いでしょうね。あのカンポ広場は不思議な空間でいいですね。

今回は飛行便の関係でピサに泊まって、フィレンツェやシエナを攻めました。全部公共交通手段で通しましたが、連絡は悪いし、当然時刻通りには来ない。イタメシは素晴らしかったですが、いい加減なバス時刻表も、やっぱりマンマミア、イタリアでありました。

増淵 文規

英国ダラム便り (その14)

[英国人は働き者?]

帝京の留学生に英国で感じた日本との違いを訪ねると、まさきにお店の従業員のサービスの悪さをあげます。レジの女性がコーラを飲んだりパンをかじりながら仕事をしていることも多く、皆びっくりしています。だらだらした態度にも不愉快さを感じているようです。キャンパス内での修理工事などでもおしゃべりしながら、ゆっくりやっているように見えて、日本人の必死な労働風景とは全く違って見えるのでしょうか。学生の観察は正直で、私もその通りだと思っていますが、学生には「それでもフランス人よりは働き者」だと言っています。OECD 統計によれば2010年の日本人の年間実労働時間は1,728時間、何と米国人は日本人より多く(?)1,787時間。英国も結構多いほうで1,625時間。少ない方はもちろんフランスの1,476時間ですが、「働

き者」イメージのドイツ人の労働時間が先進国中最も短い 1,413 時間です。実はこの数字にはパートも入っていますので、パートの多い日本の一人当たりの数字は低く出てしまいます。フルタイムの労働者だけを取れば日本の労働時間はちゃんと米国より多くなると思います。英、独、仏の比較はこの数字の通りでしょう。日本人には「怠けもの」に見える英国人も欧州のなかでは「働き者」なのです。ドイツが少ないのはどうしてでしょうか？確かに夏にきちんと長期休暇はとるし、残業はしない。よほど効率がいいんでしょうか。私の在独経験でも、ドイツ人労働者の仕事に対する誇りと仕事の集中力は感じました。この点は英国人やフランス人よりかなり上だと思っています。そうでなければあのドイツの経済力はあり得ませんよね。

英国は何かにつけ米国と欧州大陸の中間 (in between) の国だと思っていますが、労働時間もその通りになっています。フランスのようにどこも休みで8月は仕事にならないということはありません。ダラムのような田舎町でも8月一斉休業と言うことはありません。労働者の休み方も夏には2週間（フランスは4週間）で、あとは小分けにするようです。残業をしないのはフランス人と同じですが、それでも仕事たまると土日にかたづける人もいます。大学関係者ばかり見ているわけで、普通の企業とは多少違うかもしれませんが。英国では時間を限定してお店の日曜営業もやっています。パリは相変わらず観光中心スポットの店も日曜は閉まりっぱなしですね。かの有名なドイツの閉店法（土曜日の午後と日曜は店を開けてはならない）は今でも健在だと思います。英国の方がずいぶんと flexible な印象があります。終戦後からサッチャーさんの出てくる前まで、英国はストライキの国というイメージ、怠け者労働者のイメージでしたが、もともとは怠け者 (lazy) をひどく嫌う国民性だと思います。Work hard という言葉は大好きです。そうしたいところながら、多くの人がそのようにできないのが問題で、集中力の弱さなのか、効率の悪さなのかでしょう。フランス人はそもそも労働 (travail) はその語源

からして苦痛と思っている節があって、なるべくなら働かない方が良い。基本的なところで英国人とちょっとだけ価値観が違うような気がします。英独仏の労働観について勝手な解釈を並べましたが、帝京の学生には常々「日本人の労働効率性やWorking hardは世界のどこにも負けないから、日本の将来を心配する必要はない」と励ましています（本当は相当心配しているのですが）。彼らは生まれた時にはすでにバブルがはじけ、豊かながらに物価も給料も下がり続ける元気がない世の中で生きてきています。少子高齢化の中で未来に明るい期待が持ちにくい。あまりペシミスティックなことを言っても可哀そうですから、元気づけです。日本経済が飛躍的なスピードで発展し、昨日よりも今日の生活が目に見えて良くなるという経験をしてきた世代には、バブル後のデフレ世代の心の中身を理解するのは難しいことです。

[6月はとてもやかましい]

ダラム大学では5月24日に年度末試験が終了（英国大学の期末試験は原則年度末の一回のみ）。6月は半ば過ぎまで、終業明けのパーティーや卒業関連行事その他でキャンパス周りが大変やかましくなります。17あるカレッジごとに行いますので、毎日のように昼間からバンド音楽が轟きます。近間のカレッジでこれをやられると堪りません。特にカレッジ・ダンスパーティーは徹夜で行われるため、この日は大音響で睡眠不能です。去年はこのことを知りませんでしたので、6月は完全に睡眠不足。ただでさえ睡眠中の騒音には非常に神経質な人間ですから、今年は自衛策を講じて、近い二つのカレッジのダンスパーティーの夜は郊外のホテルに逃げ出すことにしました。普段の学期中も静かなわけではありません。特に土曜日の夜は夜中に酒を飲んで大きな声で歌いながら帰ってきます。学生の町だから仕方ありませんが、うるさい。日本の旧制高校の寮周りもやかましかったんでしょうね。卒業式には多くの親がやってくるの

は日本と同じ光景でしょう。大体数日滞在して、式に出席するだけでなく、親子でレストランできどって食事をします。この時期は普段ガラガラのレストランが満杯になります。日本と違って親離れ子離れが進んでいるかという、そうでもありません。入寮の日などは親や祖父母が遠くからきて、あれこれ面倒を見ている。英国人は物静かで紳士的（淑女的）で、大声もあげず切れることがないイメージですが、羽目をはずす時はこれが極端になる、不思議な国民です。サッカーではフーリガンが有名ですし、パンク・ファッションの本場でもあります。田舎でも土曜の夜は要注意というのが当地外国人の常識ですが、酒が大量に入るとわけのわからなくなる若者が結構多い。社会が酒の上での狼藉に甘いのかもかもしれません。先週にはダラム大学生同士のけんか騒ぎもありました。勿論泥酔状態の上です。近寄るべからず。

2013年6月10日

増渕 文規